◆看 護 部

看護部長　田中三千代

2007年度は、４月23日に日本医療機能評価機構より「認定証」授与という幸先の良いスタートの年であった。

しかし、2006年度の診療報酬改定で７対１の入院基本料が新設され、全国的に"看護師の争奪戦"という社会現象が起こり看護師確保に苦慮した１年でもあった。中でも、患者数に対する看護師の実労働時間の確保が必要になったため、育児休暇や長期病気療養など突発的な人員不足に苦慮したが、准看護師の採用、育児休暇後の看護師の雇用形態変更による雇用を促進することで何とか10対１の入院基本料を確保することができた。

人材確保は企画総務室と協力し、済生会九州ブロックや県内の看護師募集合同説明会に参加し、"済生会みすみ病院の看護"のPRを行ったが、来訪者もなく収穫はなかった。

地元看護学校訪問という地道な活動で新卒看護師７名の採用内定ができた。

人材育成では、新人看護師が３名と少人数だったので夜勤フォローを６月末まで実施することができ、新人看護師の早期離職防止、患者サービスに繋ぐことができた。

また、主任・係長を中心に従来部署毎に行っていた新採用者のオリエンテーションを再検討し、４月～６月の３カ月間に26項目のOJT教育を実施した。部署間での内容統一が取れたデモンストレーションは効果的であったなど良い結果であった。しかし、指導の注意点や指導すべきポイントなど事前指導の必要性など次年度への課題も見つかった。

がん患者に対する看護ケアの充実のため、専門的な臨床実践能力を養うことを目的に熊本県健康福祉部主催による「専門分野（がん）における臨床実務者研修」９週間の研修会に主任看護師１名が参加することができた。２月26日・27日のBLS講習会には看護師10名が受講し資格取得に挑んだ。３月16日に開催された天草パールマラソン大会ではBLS受講直後の救護ボランティアがマラソン中の心肺停止ランナーの人命救助に貢献した。

患者サービスに関しては、逝去時のカンファレンスを全症例行い、自分たちの行った看取りの看護の評価・家族の思いを聴くことができている。また、継続看護の一つの試みとして入退院を繰り返す患者さんや服薬管理、栄養管理等で看護上の問題が残った患者さんへの電話訪問を開始したが、外来の電話訪問に比べ成果が出なかった。

７月に、厚生労働省保険局委託事業「急性期入院医療における看護職員と看護必要度に関する実態調査」に協力、右記のような結果であった。

看護必要度調査　１・２病棟

レベル	1	2	3	4	5	計
７／２(月)	0	28	3	7	12	50
７／３(火)	2	26	2	8	12	50
７／４(水)	4	23	1	10	8	46
７／５(木)	0	26	1	8	9	44
７／６(金)	2	25	1	9	12	49
７／７(土)	0	21	5	6	14	46
７／８(日)	0	27	1	6	11	45
７／９(月)	0	28	2	8	12	50
計	8	204	16	62	90	380

看護必要度調査　３病棟

レベル	1	2	3	4	5	計
７／２(月)	0	13	3	3	9	28
７／３(火)	0	13	3	3	9	28
７／４(水)	1	12	5	2	9	29
７／５(木)	0	13	3	5	7	28
７／６(金)	0	14	3	3	9	29
７／７(土)	0	12	2	3	11	28
７／８(日)	0	13	0	4	11	28
７／９(月)	0	14	0	6	9	29
計	1	104	19	29	74	227

看護必要度調査　４病棟

レベル	1	2	3	4	5	計
７／２(月)	0	19	7	2	1	29
７／３(火)	0	18	7	2	2	29
７／４(水)	0	19	7	2	2	30
７／５(木)	0	19	7	2	2	30
７／６(金)	0	18	7	2	2	29
７／７(土)	0	18	7	2	2	29
７／８(日)	1	17	7	2	2	29
７／９(月)	0	18	7	2	2	29
計	1	146	56	16	15	234

1・2病棟　病棟長　斉藤真理子／村本多江子
（2008.2.1 交替）

患者の為に実践する看護として、2007年度は以下の３点を中心にその取り組みを行った。

①　顧客の視点
　インフォームドコンセントの充実、継続看護の充実
②　新たなる取り組み
　整形外科看護の実践、腎不全患者のCAPDの導入
③　学習と成長の視点
　学会での発表、自発的勉強会の実施

①　インフォームドコンセントの充実においては、患者家族の反応の記載を行うことでその理解度を確認して看護ケアの充実につなげている。
　月に２～３例の記録監査を行い記載状況の確認を行った。
　退院後についての説明は79.8％、　医師の説明は57％、入院診療計画書の説明は13％インシデント発生時の記載は38％であった。記載状況はまだ低いが、患者家族の立場に立ったインフォームドコンセントへの意識づけとなっている。
　継続看護においては、病棟から外来への依頼を13名実施。2007年度新たに退院後の患者への電話訪問を３名の患者へ実施。いずれも患者からの良い反応を得ている。今後症例数を増やして更なる充実を図って行きたい。

②　新たなる取り組みとしては、整形外科看護の実践を行った。当院では初めて行われる人工骨頭置換術、人工股関節置換術、人工膝関節置換術に対する看護の実践。経験の少ないスタッフで、デモンストレーションを含んだ勉強会を行い、一症例ずつ医師の指示のもと感染予防策、体位肢位の確認、ADL、リハビリの確認を行いながら看護を実践し、その数も増えている。
　また腎不全外来の開始に伴い、入院患者へのCAPDの導入を開始。当院では初めての導入であったため、業者を含めた事前勉強会デモンストレーションを行った。
　スタッフ、患者・家族と共に導入への取り組みを実施し、在宅での管理が可能となった。

③　学習と成長の視点からは、2007年度は全国済生会糖尿病学会へ一題、全国済生会学会へ一題の発表参加を行った。発表課題への取り組みと、全国での発表がスタッフの自信とモチベーションアップへとつながった。
　自発的勉強会として自分たちで役割分担を行い、予定表を作成。担当者を決め勉強会を実施した。自分たちの中で何が優先的に知識として必要かを考えることにより、与えられる学習ではなく必要とされる勉強会となった。

3病棟　病棟長　中村羊里子

2007年度３病棟看護スタッフは、新人看護師２名を含む看護師17名でスタートした。８月よりパート職員１名増員となり、12月と2008年２月に准看護師各１名を迎え、年度末には19名の看護スタッフとなった。また、２月よりＲ全勤務３名とし夜間の看護ケアの充実と安全対策・救急患者対応に取り組んだ。准看護師採用とＲ全３名勤務への移行に伴い、業務の見直しと再構築を行ない改善に取り組んできた。

１．顧客満足の視点
　インフォームドコンセントの充実を目標とし、入退院時・抑制時と解除時などインフォームドコンセントの確認と患者家族の反応を記録に残した。患者・家族の精神面や社会面に関する看護記録が増加している。
　抑制に関しては、事前承諾書100％、抑制解除後患者アンケート配布率56.5％・回収率100％、説明や情報提供「十分だった」83.3％であった。アンケートを通し、抑制に対する医療者側の思いを伝え、家族の苦悩に共感を示すことができた。
　継続看護については、必要性の判断に迷う事例もあったため、毎朝カンファレンス時、退院患者の継続看護依頼の必要性を検討した。外来への継続看護情報提供１～５例／月、外来から病棟への情報提供１～３例／月あり、退院後の患者の経過が分かり受け持ち看護師のモチベーション向上に繋がった。また、退院患者へのアンケート調査を実施し、配布率・回収率共に90％以上であった。看護師接遇への満足度は90％以上であり、クレームに対しては病棟カンファレンスにより情報共有し改善策を実施した。

２．内部プロセスの視点
　セーフティマネージメントのさらなる充実を最重要課題とした。スタッフのセーフティマネージメントに関する認識が高く、小さな事例の報告も数多く出された。誤薬については全例カンファレンス・分析（時系列・SHEL分析）を行い、再発防止に努めた。また、事例に関連する各委員会において、手順・マニュアルの見直し・改訂に繋げるよう働きかけた。

３．財務の視点
　病床管理会議において検討し病床の有効利用を行なってきたが、目標（病床利用率85％以上）達成には至らなかった。平均在院日数については目標達成できた。
　全病棟の消耗品を３病棟で一括管理することとし、デッドストックの減少と消費量の削減ができた。

４．学習と成長の視点
　効果的な勉強会・研修会の開催や院外研修への参加を目標にした。院内研修参加率は60％前後、院外研修については参加回数平均6.6回（１～18回）であった。また、病棟勉強会は全スタッフが月ごとに担当し、１回／月実施でき、参加率は平均80％であった。

４病棟　病棟長　中川れいこ／斉藤真理子
（2008.2.1 交替）

2007年度の目標として、「ケアの向上」、「業務の効率化」、「病床利用率アップ」を課題とし取り組んだ。

１）ケアの向上

①　FIMの導入

看護師とセラピスト間のケアの視点を同じくするために、リハビリ評価にＦＩＭを使用し、ケアの向上を目指している。毎月の症例を通してＦＩＭの検討会を行った。

この取り組みの中で、入浴に関する評価においては、看護助手援助に関する情報が必要であることが明確となり、入浴介助におけるアセスメント表を作成した。アセスメント表の活用により、リハビリのアプローチ方法や具体的援助方法が明確となり、ケアの向上につなげることが出来た。

８月、９月の転・退院患者31名（78.5±14.4歳）におけるＦＩＭの改善点数は15.0±13.7と全国回復期リハ病棟連絡協議会調査における2006年のデータの15.9±5.6と比しばらつきはあるが平均に近い改善点数であった。

②　認知症ケア

ケアカンファを通し行っている転倒転落事故防止への取り組みの実際の評価を済生会学会にて発表することが出来た。

③　家族看護

家族看護の研修を受けたスタッフを中心に伝達講習を行った。また、スタッフ全員が一例ずつ症例発表を行い、カンファレンス形式で家族を含めた関わりをディスカッションした。それぞれの関わり方をスタッフ間で共有することで、知識を深めると同時に患者・家族の心理の捉え方、アプローチの方法などをお互いに学ぶことが出来た。

２）業務の効率化

投薬の確認作業にかかる時間を短縮するため確認工程の見直しを行い、投薬カートを導入した。導入により確認時間の短縮が図れた。

３）病床利用率アップ

患者情報を入院時の時点から把握し、スムーズな一般病棟からの受け入れが出来るよう、病棟間、セラピスト、ＭＳＷからの情報を得る取り組みを行っていった。

病床利用率80％以上を目標としたが、年間の平均病床利用率は70.4％であった。経営安定化のためには、病床利用率のアップは継続課題である。

外来・手術室　主任　山口美穂

外来・手術室は、「感じる心･考える看護・実践する力」を基本方針とし、外来診察室、救急外来、内視鏡検査、手術介助を患者満足・安心・安全を目標に、皆で力を合わせて取り組んだ。

１．顧客の視点

継続看護の充実を目標に、病棟より申し送りを受け、プラン立案、実施評価を行った。45例／年の継続看護の申し送りがあり、計画率は100％、外来評価率71％であった。継続受持ち制として取り組み、創傷が改善した例や、糖尿病患者の継続ケアを行うことができた。また、ハイリスク検査後の電話訪問を実施し検査後の患者状態把握、異常の早期発見に努めた。外来患者は高齢者が多く、安心できるという声が聞かれている。インフォームドコンセントについては、入院時、告知時、ハイリスク検査時など説明に伴った記録ができておらず、今後の課題である。

麻酔科医の常勤に伴い、緊急手術や新たな整形外科手術など、医師と協力してアクシデントなく実施できた。術前術後訪問は下半期に80％の実施であった。今後、麻酔科医と協力し、術前術後訪問の全例実施を行い、周手術期ケアの評価を行っていく必要がある。

一日平均128.1人の外来患者数、前年度と比較すると5.7名増。診察室の増築や常勤整形外科医の増員により、外来患者数が増加した。業務も増えたため看護師の役割分担を明確にし、スタッフや他部署との協力を行い、スムースで安全な外来診療・看護ができるように取り組んだ。外来待ち時間調査を行ったが、前年度と比較して大きな時間短縮はなかった。患者さんからの意見箱投書には、早急に改善策を挙げて対応し、クレームの減少や待ち時間の短縮につながっている。

２．内部プロセスの視点

セイフティーマネジメントの更なる充実のため、機能評価受審認定後も、作成した看護基準手順・マニュアルを遵守してアクシデント・インシデントの防止に努めた。採血時のグローブの着用や針ボックス使用の徹底を行った。またカンファレンス、病棟会で事例検討を行い対策を挙げ実施した。

院内看護研究は、手術を受ける患者の不安に着目し、受持看護師の有無で不安の差があるか検討した。結果、外来受診時―術前―術後に一人の看護師が受持つ方が不安を減少することがわかった。兼任の部署であるため役割分担が難しいが、出来る限り手術患者受け持ち制を行い、患者の不安軽減を行っていく必要がある。

３．財務の視点

緊急手術や緊急内視鏡に対応出来るよう、手術看護、内視鏡技師の人材育成を行った。済生会熊本病院で手術室研修を受け、緊急手術や整形外科手術の体制づくりができた。

検査、処置、手術のコストもれがないよう医事室と協力し、二重チェックを行った。

４．学習と成長の視点

外来看護や手術看護に関する勉強会を行った。院内や院外の勉強会研修会に各自参加し、自己啓発に努めた。今後も効果的に計画的に勉強会の実施を行い知識技術の向上を目指す。

５．その他

内視鏡検査－GF 1,182例　CF 488（うちGP、CP 51例）
ERCP（処置含む）31例　PEG 34例
止血、EIS、EVL　19例
前年度よりCFは増加したが他は減少傾向。

救急外来患者－5,470名　うち転送患者 192名
前年度より161名減